慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『永久百首』の異伝歌
Sub Title	
Author	伊倉, 史人(Ikura, Fumito)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1994
Jtitle	三田國文 No.20 (1994. 6) ,p.1- 10
JaLC DOI	10.14991/002.19940600-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19940600-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『永久百首』の異伝歌

伊倉　史人

一

『永久百首』の諸本については、まず滝沢貞夫氏による「永久四年百首伝本私考」（『信州大学教育学部紀要』第35号～第38号／昭和五一年一一月～昭和五三年三月）において、三二の伝本が調査され、一通りの分類整理がなされた。そして、その成果を踏まえて刊行された橋本不美男・滝沢両氏の『永久四年百首和歌とその研究』（昭和五三年三月　笠間書院）（以下『校本』と略称する）では調査伝本総数は三四本に増え、また「有注本系」が「組み合わせ本系」と改称されるなど若干の見直しがなされてはいるものの基本的には前稿がそのまま受け継がれ、今日まで『永久百首』の伝本研究の基礎となっている。

『校本』には既に異伝歌についての言及もあり（第二章「伝本とその系統」・「Ⅶ　永久四年百首の異伝歌」）、以下に掲出する「一見異伝歌の様に見える」五首の歌の存在が指摘されている。[1]（『校本』の掲出順とは異なる。）

A　わかなつむとしはへぬれとかすかのゝもりはけふをやはるとしるらん

B　かちそむるしかまのみそのかれはてゝあひみてすきし神無月かな

C　いくよねぬ白玉よするましらゝの浜松かけに松葉折しき

D　よしの山みねのあらしのはけしさにさゝのいほりは露もたまらす

E　くちなしの色にたなひく薄雲の雪けの空と誰か見さらん

しかし、『校本』では、この五首の歌は、実は『堀河百首』の歌であったり、あるいは単なる歌順の混乱によって異伝歌に見えるだけであって、『永久百首』には異伝歌は存在しないという判断を下している。

本稿では右の「一見異伝歌の様に見える」五首の歌を再検討し、またその結果を踏まえて『永久百首』の成立の背景についても若干の私見を加えたいと思う。

二

以下順次に前掲の「一見異伝歌の様に見える」五首の歌を『校本』の見解を参考にしつつ検討していく。

まずは、A～Cの三首の歌から始めたい。この三首は静嘉堂文庫所蔵の慶安四年刊本の表表紙見返しの書き入れに次のように拾遺されているものである。[2]

夫木廿二野　永久四年百首　藤原忠房

わかなつむ年はへぬれとかすかのゝもりはけふをやはるとしるらん

百首中ニ此歌なし、いかゝ

同同園　永久四年百首　仲実朝臣

かちそむるしかまのみそのかれはてゝあひみて過し神無月哉

同廿五濱　永久四年百首　仲実朝臣　契沖云非次郎百首哥欤

いくよねぬ白玉よするましらゝの濱松かけに松葉折しき

「諸持[?]云此哥堀河初度百首の中旅出たり」（「　」内朱カ）

静嘉堂所蔵の刊本は外題に「堀河院次郎百首清水浜臣校完」（刊本の元題簽ではなく、後補題簽）とあるように清水浜臣の手校本で、「塙本」（群書類従本）、『夫木和歌抄』、『散木奇歌集』等によって校異や歌語等への注釈を加えている。右の書き入れも浜臣によるものと思われる。

さて、これらの三首はこの書き入れからも分かるように『夫木和歌抄』から『永久百首』の異伝歌として拾遺したものであるが、既に契沖、浜臣らも『永久百首』詠としては疑問を抱いていたようである。

まず、A歌は、『夫木和歌抄』雑部四、「森　かすがのもり」（一〇〇一六）に収められ、出典・作者を「永久百首　藤原忠房」とする。何題の詠歌かは記されていない。『校本』は当該歌について、出典が不明であることから、あるいは現存しない『永久百首』の伝本に見られた唯一の異伝歌である可能性を示唆している。しかし、実は『袖中抄』（三一三）「とぶ火の野もり」の項目に「寛平法皇春日詣之時、大和守忠房所ノ獻歌」として載録されており、『古今集』歌人の藤原忠房の詠であることが判明する。『永久百首』歌人源忠房と同名による『夫木和歌抄』編纂時点での誤認であろう。

次に、B歌も書き入れ通り『夫木和歌抄』雑四、「園　しかまのその」（一〇一八一）に収められ、出典・作者は「永久百首　仲実朝臣」となっている。同様にC歌も『夫木和歌抄』雑七、「浜　ましらのはま」（一一八一一）に収められ、出典・作者は「永久百首　仲実朝臣」となっており、書き入れの記述は正しい。しかし、実際は『校本』や書き入れの指摘するように、B歌は『永久百首』の「経月恋」題源兼昌詠（四四〇）であり、C歌は『堀河百首』の「旅」題仲実詠（一四六二）である。これらも『夫木和歌抄』編纂時点での誤認であると考えられるが、両首とも『永久百首』（『堀河百首』）の題にそって載録したのではなく歌枕の用例として載録しているので、作者名や書名への配慮に欠け、誤ってしまったのであろうか。

次に、D歌について検討したい。

よしの山みねのあらしのはけしさにさゝのいほりは露もたまらす

この歌は、国立国会図書館蔵本の「暁月」題大進詠として記されている（同本を校合に利用したと思われる書陵部蔵阿波国文庫旧蔵本には、D歌が後掲二六六番歌に傍記されている）が、諸本の伝える「暁月」題大進詠は、

鐘のをとにおとろかされてにしへ行月の光をなかめつるかな（二六六）

であり、一見すると異伝歌のように思われる。しかし、これは『校本』も指摘するように「嵐」題大進詠（二七三）と同じ歌であり、国立国会図書館蔵本も「嵐」題にはD歌を重複して載せている。『永久百首』の秋部は「暁月」題に続き「嵐」題が設けられているので、伝本書写上目移り等のために本来の「暁月」題詠の代わりに「嵐」題詠を誤って写してしまったのであろう（国会図書館蔵本の書写者が誤写したか、親本が既に誤った形になっていたのかは不明）。

最後にE歌、

くちなしの色にたなひく薄雲の雪けの空と誰か見さらん

であるが、この歌は島原市立公民館蔵松平文庫本と上野理氏所蔵阿波国文庫旧蔵本では、「初雪」題俊頼詠として見られ、また『校本』の底本となっている日本大学総合図書館蔵一条冬良筆本と竜谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本では諸本が「初雪」題俊頼詠（三四六b）として有する、

めつらしき花のみやこのはつ雪を九重にさへふらしてそみる

と併記されているものである。

さて、本来ならここでこのE歌の検討をするところであるが、その前に触れておきたい『校本』未所収の『永久百首』の伝本があるので、次節ではそれについて述べることにする。

三

『永久百首』の伝本については前述したように『校本』が研究の基本となっているが、その後の伝本研究に関しては、内田徹氏により、『校本』に未紹介の竜谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本が紹介され、新たに冬良本系の一本に加えられたに留まっている。[3]

ところで、このほど『校本』や内田氏によって紹介された伝本の他に次の五伝本が存在することを知り調査を行なった。[4]

岡山大学付属図書館小野文庫蔵本＝岡山本
慶応義塾図書館渡辺文庫蔵烏丸家旧蔵本＝慶大本
太宰府天満宮蔵本＝太宰府本
宮城県図書館伊達文庫蔵本＝伊達本
水府明徳会彰考館蔵B本[5]＝彰考館B本

結論から言えば、岡山本、慶大本、太宰府本は「組み合せ本系」に、伊達本は「冬良本系」に属し、彰考館B本は群書類従本（冬良本系）の粗悪な写しと考えられる。

さて、右の伝本すべてを紹介することは紙数の都合上できないので、本論に直接関わる岡山本と伊達本についてのみ以下に略解題を記すことにする。

岡山大学付属図書館小野文庫蔵本（P911.13/9/小野）

〔江戸初期〕写　一冊

袋綴。香色表紙（竪二九・五×横二一・七糎）。外題、左肩薄桃色題簽「百首和歌 永久四年」（後補別筆）。料紙、斐楮交漉紙。墨付、三二丁。毎半葉一四行、和歌一行書。「元日」題にのみ作者名を和歌の下に付す。字面高さ、約二三・〇糎。内題、「百首和歌 永久四年十二月廿日」（1オ）。目録（歌題一覧）題、「百首和謌」（1ウ）。作者一覧、歌題一覧に続いて本文に入る。奥書、なし。

印記、表表紙見返しに「佐藤」の円形朱印と「重延」の方形朱印（陰刻）、巻頭（1オ）に「岡山大學／法文學部／圖書之印」の方形朱印を捺す。

本文の所々に同筆の異本注記（墨）があり、紺色の不審紙が数十箇所にわたって歌頭・句頭に貼付されている。また、「待人恋」題の下には「此題下ノ寝覚戀ノ次ニヤ入也」と記された付箋が貼付されている。

さて、この伝本は前述のように「組み合せ本系」に属するが、以下に『校本』に依拠してその特徴をまとめ、岡山本と照合しておく。

イ　「経月恋」題と「経年恋」題が入れ替わり（a）、「待人恋」題が「不見書恋」題の前に位置を替えている（b）。

岡山本同じ。

ロ　「八月十五夜」題兼昌詠（二四三）が大進詠（二四五）の次に置かれ（a）、「九月九日」題忠房詠（二四九）と兼昌詠（二五〇）の位置を入れ替えている（b）。

岡山本は（b）の特徴を欠くが、同系統の中では書陵部蔵鷹司家本と同部蔵七人百首和歌本もこの特徴を欠いている。

ハ　歌題一覧を元来は欠いていたと想定される。

岡山本は歌題一覧を有する。但し、本文では「八月十五夜月」となっている歌題が、歌題一覧では「八月十五夜」に「月」を傍記し、後から本文の歌題に合わせた形跡が見られることから、本来は歌題一覧を欠いていたと思われる。

ニ　作者一覧は脚注を持たない最も簡潔な書式である。

岡山本同じ。

ホ　端作は「七人百首歌」「七人百首和歌」とあり（a）、その下に「号次郎百首」とある（b）。但し「永久四年十二月廿日」の字句はない（c）。

岡山本はホの特徴をすべて欠くが、端作は後で補われた歌題一覧にあるため、この伝本の本来の特徴を示すものではない。

ヘ　「余寒」題以降の各歌の作者名を欠く。

岡山本同じ。

ト　『堀河百首』の一四人本の題末付注本との組み合せ本であったと思われる。

『校本』所収の八本に、今回調査した三本を加えた「組み合せ本系」の一二の伝本中、『堀河百首』とともに伝えられているのは四本にすぎない。

以上、『校本』の掲げる「組み合せ本系」の特徴に異なる点も若干見られるが、元来これらの特徴は、これまで知られていた「組み合せ本系」のすべての伝本が、ひとつももらさずに有しているというようなものではなく、許容範囲内での違いであ

ると考えられる。また、具体例を挙げる余裕はないが、本文異同の状況からみても岡山本は「組み合せ本系」に属するものとみて良いであろう。

また、岡山本には上記に挙げた「組み合せ本系」の分類基準となる特徴以外に次の二つの特徴が見られる。一つは「稲妻」題兼昌詠（二七八）が大進詠（二八〇）の次に置かれている点である。この特徴は他のどの系統の伝本にも見られないこの伝本独自のものである。

もう一点は「初雪」題俊頼詠として諸本の有する「めつらしき…」（前掲）ではなく、「一見異伝歌の様に見える」E歌を有しているという点である。

宮城県図書館伊達文庫蔵本（伊911. 234/45）

〔江戸末期〕写　一冊

袋綴。表表紙は黒色布目表紙（竪二六・二×横一八・六糎）。外題、左肩子持枠題簽「百首和歌　全」（本文別筆）。但し、現在は破損が甚だしく、本体から脱落分離し、楮紙の保護表紙に包まれている。裏表紙は焦茶色表紙。この表紙の形態は、同文庫に伝わる「堀河院百首和歌」（伊911. 23/1、十四人本）と同様のものであり（但し後表紙を欠く）、筆跡も同一の手によると思われる。料紙、薄様。墨付、四四丁。毎半葉一〇行、和歌一行書。但し「猿」題大進詠（七〇一）のみ上句と下句を分けて二行書きにする。作者名は全題全首に亙って和歌の下に記されている（四三一～四三五番歌の作者名は別筆か）。また「旧年立春」題の仲実詠では、諸本反歌に作者名を記すが、この本は長歌に付す。字面高さ、約二一・一糎。内題、「百首和歌」（3ウ）。目録題、「百首和歌□□四□十一月廿日」（1オ）。歌題一覧、作者一覧に続いて本文に入る。奥書、なし。

印記、見返し、本文巻頭（3ウ）に「宮城縣／伊達文庫／圖書館」（長方形朱印）を捺す。

本文と同筆と思われる異本注記（墨筆）が見られる。

次にこの伝本の主だった特徴を見ていくことにする。

1　端作に「□□（水カ）（久カ）四□（年カ）十一月廿日」とある。

2　作者一覧の書式は「従三位行左京大夫源朝臣顕仲」の下に「神祇伯　六条右大臣顕房公男」の注を付す。他には常陸と大進の二人に「皇后宮女房／肥後守定成女本名肥後」「六条院女房／同定成女」の注を付すのみで他の四人にはない。

3　部立てを欠き、代わりに「元日　春十八首」「賀茂祭　夏十二首」と記す。

1～3の特徴は「細川幽斎校合本系」の諸本に見られるものである。但し、1の特徴は「冬良本系」の神宮文庫蔵村井古巌奉納本に見られ、2の特徴についても「冬良本系」の書陵部蔵葉室家本、島原市立公民館蔵松平文庫一本にも見られる。

4　歌題一覧の「□亀」の下に「□（水カ）鶏」とあり、歌題の「□亀」の下にも「水鶏イ」とある。

この特徴は「冬良本系」の神宮文庫蔵村井古巌奉納本にのみ見られるものである。

5　「経月恋」「経年恋」の各題の「経」の部分に「隔」という異本注記が見られる。

「陽明文庫本系」の陽明文庫蔵本、国立国会図書館蔵本は

「経年恋」題を「隔年恋」題とする。「陽明文庫本系」の伝本のうち右のような特徴を持つものを対校本の一つとして用いたと考えられる。

6　「初雪」題の三四七～三四九歌の作者表記には「忠房（常陸イ）」（三四七）「兼昌（忠房イ）」（三四八）「常陸（兼昌イ）」（三四九）という異本注記が付されている。

7　「隣」題の六七二・六七三歌の作者表記には「常陸（大進イ）」（六七二）「大進（常陸イ）」（六七三）という異本注記が付されている。

6・7の異本注記の方が本文になっている伝本には、「冬良本系」の書陵部蔵葉室家本、「細川幽斎校合本系」のすべての伝本（一一本）「校合本系」のすべての伝本（四本）があげられる。

8　「滝」題の俊頼詠（五三六）と忠房詠（五三七）を入れ替えるが、五三六歌には「忠房」、五三七歌には「俊頼」と異本注記が付されている。

この特徴を持つ伝本は他にはない、伊達本独自のものである。

9　日本大学総合図書館蔵一条冬良筆本と異本注記まで一致する本文を三一箇所有する

10　同文庫には同体裁、同筆の『堀河百首』が伝わる（前掲）。

堀河百首と合綴ないし組み合わせで伝えられたと思われるものには「冬良本系」と「組み合わせ本系」がある。この本が同文庫の堀河百首とともに伝えられたという確証はないが、装丁の具合や筆跡からはその可能性が考えられる。

11　「初雪」題の俊頼詠に「一見異伝歌に見える」E歌を持ち、諸本が「初雪」題の俊頼詠とする「めづらしき…」（三四六b）を傍記する。

E歌に三四六b歌を併記する伝本には日本大学総合図書館蔵一条冬良筆本と竜谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本があるが、いずれも「冬良本系」に属する。

以上のうち1～3の特徴は「細川幽斎校合本系」の特徴に一致するが、6、7、9、10、11の特徴から判断すると「冬良本系」により近いと考えた方が良いと思われる。元来「細川幽斎校合本系」の諸本は「冬良本系」の書陵部蔵葉室家本系を祖本とし、幽斎によって「組み合せ本系」の伝本等で校合、合成されたものであり系統的には近似する。よって前述の1～3の特徴のごとく「細川幽斎校合本系」の分類基準になるような特徴も、「冬良本系」の伝本の中にも見い出すことができるのである。総合的に考え、伊達本は「冬良本系」に属すると判断する。

さて、やや煩雑な説明に紙数を費やしたが、問題は「一見異伝歌の様に見える」E歌が今回調査した『校本』未所収の五伝本のうちの二本に現れるところにある。これで『校本』所収の三四本、内田氏の調査された竜谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本、それに今回の五本を加えた四〇の伝本中の六本にE歌を見つけることができ、その出現する割合は他の「一見異伝歌の様に見える」歌に比して高く注目に値する。次節では、このE歌について考察を進めることにする。

四

「一見異伝歌の様に見える」E歌（三四六a）についてもう一度まとめておくことにする。

くちなしの色にたなひく薄雲の雪けの空と誰か見さらん

このE歌は、「組み合せ本系」の島原市立公民館蔵松平文庫本、上野理氏所蔵阿波国文庫旧蔵本、岡山大学付属図書館小野文庫蔵本に「初雪」題俊頼詠として見え、「冬良本系」の日本大学総合図書館蔵一条冬良筆本、竜谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本、宮城県図書館伊達文庫蔵本では諸本が「初雪」題俊頼詠（三四六b）として有する、

めつらしき花のみやこのはつ雪を九重にさへふらしてそみる

と併記されている。

ところで、伊達本の当該歌には「くちなしの哥雑の雲の哥ニ出、イ本めつらしきの哥可用」とという頭注が付けられている。はたして「雲」題俊頼詠（四九四）を見ると、

くちなしの色にたなひくうき雲を雪けの空と誰か見さらむ

というE歌に酷似する歌を見つけることができる。このことから『校本』はE歌を「雲」題詠は異伝歌ではなく、単に歌順が混乱したものと結論付けている。同様の例としては前述のD歌があったが、あの場合「暁月」題と「嵐」題は連続する歌題であり、歌順の混乱が起きる可能性があることは既に述べた。しかし、このE歌の場合、冬の「初雪」題と雑の「雲」題ではかなりの距離があり、単純に歌順の混乱だけにその原因を求めることは些か無理があるように思われる。歌の内容もE歌（三四六a）は充分に「初雪」詠として読むことも可能で、この点でも大進詠とは異なる。

また、E歌（三四六a）と「雲」題詠では三句目がそれぞれ「薄雲の」と「うき雲の」と本文に異同が見られる。両首の三句目については諸本異同無く、やはり「雲」題詠（三四六b）が「初雪」題に混入したとは考えられない。

さらに、E歌（三四六a）は『夫木和歌抄』に入集している（七二六〇・冬部三／雪）のであるが、そこでは「永久四年百首　初雪　同（俊頼朝臣）」という詞書が付され、「初雪」題詠として載録されていることが分かる。三句目は「うす雲を」で、「の」と「を」の違いはあるがE歌（三四六a）に近い本文を持っている。『夫木和歌抄』における『永久百首』詠の入集状況を見てみると、先のA～C歌のように記述に信頼を置けない例もあるが、『永久百首』題を概ねそのまま『夫木和歌抄』の分類でも採用していると考えられる。『永久百首』の伝本の中には、「初雪」題俊頼詠にE歌（三四六a）を持つものが初期の段階から存在したのではないだろうか。

E歌（三四六a）を有する六伝本は、前述のごとく「組み合せ本系」（総数一一本）三本と「冬良本系」（総数八本）三本（三四六b歌と併記する）とに分けられる。このうち「組み合せ本系」は『堀河百首』の最も草稿性の強い「題末付注本系」と組み合され伝わったもので、やはり最も草稿の形態を留めているものと考えられている。「初雪」題俊頼詠にE歌（三四六a）のみを持つ伝本はこの「組み合せ本系」の方である。また「冬良本系」の本文は現存伝本の丁度中間の位置にあると言われるが、この系統の伝本の中にE歌（三四六a）と三四六b歌を併記する三本の伝本があることも興味深い。これらのことも先の推測が強ち間違っていないことを物語っているのではない

だろうか。

しかし、このように考えた場合でも俊頼は「初雪」題と「雲」題で酷似する歌を詠進したことになり、依然として疑問が残る。

五

俊頼の家集である『散木奇歌集』には『永久百首』詠の百首すべてが載録されているのではなく、四分の三の七五首が収められている。「初雪」詠としては三四六b歌（冬部・六五三・「同じ心〔初雪〕を」）を、「雲」詠としては四九四歌（雑部・一二六一・雲）が載録されている。ところが、その七五首を通覧してみると、例えば「星」題の歌を『散木奇歌集』で探せばそれは夏部（五月）に収められ、しかも詞書では「郭公をよめる」（二四四）となっている。また「桂」題詠は「桂の枝にかけて人のがりつかはしける」（二一一）という詞書を持つ。このように『散木奇歌集』の側から見ると、『永久百首』詠のすべてが新たに詠まれたのではなく、中には既に詠んでいた別題での詠や贈答歌として詠まれていたものを流用していたことが分かる。『散木奇歌集』の編纂に際して詞書に操作が加えられた可能性も考えられるが、「落花」（一〇七「花をよめる」）「桃花」（一五一「はるに桃花みやりてよめる」）「蟬」（三四一「せみのからをみてよめる」）「秋風」（三七二「夕のかぜといへる事をよめる」）「八月十五夜」（四六八「もちづきのこまをよめる」）「九月九日」（五四一「九月九日菊してかほなでよと人の申しければよめる」）「秋夜」（五五一「秋夜ながき心をよめる」）「嵐」（六〇〇「聞嵐述懐」）「秋山」（五八二「たつたの山をよめる」）「蚕」（五六一「秋のくれにきりぎりすのなくを聞きてよめる」）「不見書恋」（一〇三六「人のもとよりたびたび申せど御かへりなきはいかなることぞ、もし文をみぬかなどいひたる人の返事にしける」）等の各題では旧詠を流用した可能性が強い（括弧内は『散木奇歌集』の詞書）[6]。

ところで、『堀河百首』の大江匡房の「霞」題詠も『江帥集』（一〇）では「於太宰府詠之、かすみ」と詞書にあり、既に詠まれていた歌を流用していたことが知られている。太宰府からの帰京が康和四年（一一〇二）六月一三日で、長治二、三（一一〇五、六）年と言われる『堀河百首』の第一次成立（実際にはそれより以前に詠進完了していなければならない）まで間がなかったことが匡房に旧詠を流用させたという（『本校堀河院御時百首和歌とその研究本文研究篇』三四一頁）。そして、永久百首における俊頼も堀河百首における匡房と同じ状況であったと考えられないだろうか[7]。

『永久百首』成立以前、俊頼は天永二（一一一一）年五月二五日までには木工頭を退き（『中右記』）、その翌天永三（一一一二）には伊勢に下向したと考えられている。これは生涯に二度行われる伊勢下向の初度にあたる。その後永久四（一一一六）年五月の『中務権大輔顕輔歌合』への出詠までの間は、伊勢あるいは田上などに滞在し、都を離れていたと推測されている。『永久百首』の企画の時期は中宮篤子内親王の没後、永久二年一〇月一日以後のことであるが、「旅人のかりのしの屋に年くれてけふ二年とせに成にけるかな」という顕仲「元日」題詠の「二年」を事実とすれば永久四年の初め、あるいは永久三年の

終わり頃のことであろうか。俊頼の同百首への参加が決まった時期は不明だが、その頃はまだ伊勢あるいは田上に籠居していた可能性が高く、帰京後の詠進とすれば『堀河百首』の匡房に比べても詠進までの間がなかったことは想像に難くない。俊頼は『永久百首』に過去の詠歌を流用せざるを得なかったのであろう。

そうした状況の中で、俊頼は取り敢えず「雲」題詠とほとんど変わらないE歌（三四六a）を「初雪」題詠として詠進（「雲」題詠に手を加え、「初雪」題詠として流用）し、後に諸本の伝える三四六b歌と差し替えた。しかしながら、差し替えをした時点では既に最初の詠、すなわち三四六b歌を「初雪」題詠として持つ伝本が流布し、すなわち異伝歌が生じ、僅かながらも今日まで伝えられている。そのようには考えられないだろうか。

六

以上、「一見異伝歌の様に見える」五首の歌について検討してきたが、その結果一首のみが異伝歌であるという結論に達した。『永久百首』に先行する『堀河百首』は一四人本から二種類の一五人本、そして一六人本と複雑な段階を経て成立していく過程で五十数首の異伝歌を生じさせたという。[8] 両百首の異伝歌数の差は歴然としているが、それでもこの一首の異伝歌は、従来言われてきたような「成立事情は単純で、原態はただ一つで」「歌の出し入れはなかった」（『校本』二一二頁）という『永久百首』観を見直すきっかけを与えてくれる。そこで改めて『永久百首』を通覧してみると、次のような例が散見することに気が付く。

唐人はしかのをしまに舟出してなから待つらしはたて初むなり

これは「唐人」題俊頼詠（六二七）であるが、この歌の下の句には大きな異同があり、「はかたのおきにときつくるなり」とする伝本が二五本に登る。そのうち「組み合せ本系」（総数一一本）の伝本が一〇本あり、「はかたの…」の方が草稿に近いのではないかと想像される。同題兼昌詠（六二九）は、

うなはらやはかたの奥にかゝりたるもろこし舟に時つくるなり

であり、表現上類似することを嫌った俊頼が後に改作したとは考えられないだろうか。類似した理由も、偶然とも考えられるが、詠進に時間的制約のあった俊頼が兼昌詠を参考にしたという可能性もあろう。

同様の例として、次の二例を挙げておく。まず、「蟲」題の忠房詠（二〇七）は諸本、

たゝくともさやはなるへき柴の戸はときけは夜はの水鶏なりけり

という歌本文であるが、「組み合せ本系」の伝本（九本）にのみ異同が見られ、三、四句が「うちきけはたたくはよるの」となっている。

また、「蔦」題仲実詠（二九六）も諸本、

田豆の木にはひおほはれるつたにしも時しりかほにもみちしにけり

という歌本文であるが、「組み合せ本系」の伝本（九本）を中心に異同が見られ、初句が「蔦の木に」、三句が「いたひしき」となっている。

この二例も単に伝本書写上の誤りによるものとは思われず、成立からそう離れない時点で改作が行われたと解釈するのが妥当ではないだろうか。

このように異伝歌と同様、本文異同の状況も従来の『永久百首』観の再検討を迫ってくるのである。なお引き続き別の視点、例えば和歌表現の検討などといった面からも『永久百首』の成立の背景を探ることが可能であると考えるが、それについては稿を改めて論じたいと思う。

注

（1）本稿での本文の引用は次の通りである。『永久百首』は『校本』に拠ったが、引用に際しては底本に明らかに誤りのある場合、諸本の本文を参照し改めた。『夫木和歌抄』は『新編国歌大観』に拠ったが、『改訂版作者分類夫木和歌抄本文篇』（山田清一・小鹿野茂次著　昭和五六年九月　風間書房）と『夫木和歌抄　上（下）巻』（細川家永青文庫叢刊第五・六巻　昭和五八年六・九月　汲古書院）を随時参照した。『散木奇歌集』は『新編国歌大観』に拠ったが、『阿波本　散木奇歌集本文校異篇』（関根慶子・大井洋子著　昭和五四年七月　風間書房）と『散木奇歌集』（冷泉家時雨亭叢書24　平成五年四月　朝日新聞社）を随時参照した。

（2）『静嘉堂文庫所蔵歌学資料集成』のマイクロフィルムによった。東京大学総合図書館蔵本の表表紙見返しの張り紙にもほぼ同内容のものがある（『校本』は同本から引用する）。同本は浜臣手校刊本、あるいは同刊本に「一本」と引用される浜臣所持本（所在は未確認）を「作楽庵主人」によって文政一一（一八二八）年に転写されたものと思われる。

（3）「竜谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本「永久四年百首和歌」について」『王朝文学資料と論考』（橋本不美男編　平成四年八月　笠間書院）所収。

（4）『国書総目録』『古典籍総合目録』には、名古屋市鶴舞中央図書館と岩手県立図書館にも『永久百首』の伝本の所在が記されているが、前者は慶安四年刊本であり、後者に該当する本は存在しない。

（5）B本としたのは、『校本』に紹介されている「彰考館蔵本」と区別するためである。

（6）『校本』（一六八、一六九頁）が流用歌として掲出するものとは若干異なる。

（7）この時期の俊頼の動向については、宇佐見喜三八氏「源俊頼傳について」（『国語と国文学』16―6　昭和一四年六月、後に『和歌史に関する研究』〔昭和二七年一一月　若竹出版〕に所収）、萩原朴氏『平安朝歌合大成　六』（昭和三二年一月　同朋社）「永久三年秋　大神宮禰宜歌合」の「考証」、『校本』（一六六頁）等に詳しい。

（8）『堀河百首』の異伝歌については、竹下　豊氏「『堀河百首』の異伝歌」『王朝の文学とその系譜』（片桐洋一編　平成三年一〇月　和泉書院）に詳しい。

本稿を成すにあたり、貴重な資料の閲覧を許可して下さった公私の文庫・図書館の方々に厚く御礼を申し上げます。

（いくら　ふみと）